

読者の広場

ISTC/SAC 議長が行く

ーウクライナ編ー

日本原子力研究開発機構

深堀 智生

fukahori.tokio@jaea.go.jp

1. はじめに

前々回[1]及び前回[2]からの続きで、国際科学技術センター（ISTC）の科学諮問委員会（SAC）議長として訪れた中央アジア、コーカサス地方の諸国の都市について紹介させていただく。今回は、現在何かと話題のウクライナの首都キーウについて紹介したい。

ウクライナに訪れたのは、2018年12月でISTCと兄弟関係にある国際機関「ウクライナ科学技術センター（STCU）」の招待による。STCUについては次節で概要を説明するが、旧ソ連の大量破壊兵器技術者を散逸させないという目的は同一である。ISTCの運営理事会（GB）は年2回（1回はカザフスタン、もう1回は別の加盟国にて）開催されるが、ここに定例としてSTCU事務局長を招待している。このときは、これに応える形で、STCU本部があるキーウでISTC/GBを開催することになったため、訪問が実現した。

2. ウクライナ科学技術センター（STCU）

前述の通りSTCU（Science and Technology Center in Ukraine、<http://www.stcu.int/>）は、ISTCと同様に旧ソ連諸国の大量破壊兵器（Weapon of Mass Destruction、WMD）技術者を他国に散逸させないという目的で1993年に設立された。STCUビジョン・ステートメントによると「世界の安全保障上の脅威に対処し、不拡散を推進する民間の科学技術パートナーシップと連携を支援することにより、化学、生物、放射線、核（CBRN）リスクの協調的緩和を通じて世界の平和と繁栄を推進する」とある。ただし、ISTCとは支援国（カナダ、EU、スウェーデン、米国）及び被支援国（アゼルバイジャン、ジョージア、モルドバ、ウクライナ、ウズベキスタン）が異なる。

STCU の活動は、ISTC のプロジェクト支援とは若干傾向が違い、「教育、指導、トレーニングを通じて、WMD 技術の不拡散と CBRN セキュリティの認識と責任の文化を発展させ、維持する」こととなっている。短期的には、STCU が持続可能性とパートナーシップ機能を活性化し、旧ソ連の兵器科学者や研究所の長期的な自立に寄与しない活動を単に監視し続けるのではなく、科学者や研究所がグローバルな経済界やビジネス界にうまく統合されるよう導くことで、彼らが自立できるよう支援する。目標は、STCU 助成金受領者が自立し、国内およびグローバルな科学技術問題（商業的および非商業的）に価値の高い貢献をすることである。また、いわゆるプロジェクト助成以外に、各種資格の取得支援(セミナー、ワークショップ等)、商業化と特許支援も助成金の対象となる。

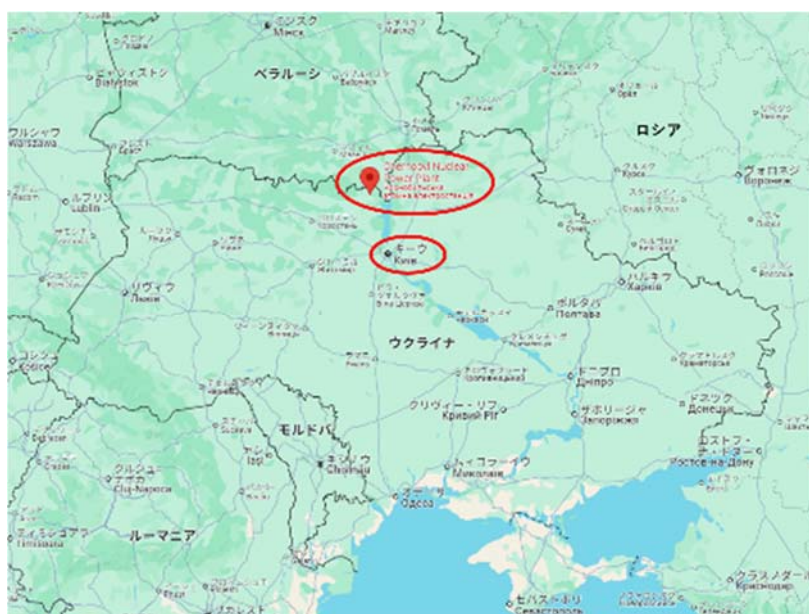


図1 ウクライナと周辺の地図 (©Google Map)

3. 首都キーウ

この訪問は、GB の会議のためだけで、視察等は含まれていなかったため1泊2日の非常に短期であった。したがって、足で稼ぐ情報は非常に少なく、当時の生の情報はあまりお伝え出来ないことを危惧するが、できる限りご紹介したい。

ウクライナは、東ヨーロッパに位置する共和制国家であるが、「ロシア侵攻」による戦闘のニュースで皆さんご存じと思われるので、地勢に関しては図1に地図を掲載するに留める。人口は2021年時点で約4159万人、ヨーロッパで7番目に人口の多い国であったが、現在どの程度精度のある情報があるかは不明である。「ウクライナ」の語源については、「国、辺境」といった意味であるという説がある。前者は「内地」を意味する中世ルース語の「ウクライナ (оукраина)、ヴクライナ (вкраина)」という単語に基づいてお

り、後者は「僻地」を意味する近世のポーランド語の「オクライナ (okrajna)」やロシア語の「オクライナ (окраина)」という単語に基づいているそうである。「ウクライナ」/「ヴクライナ」に関連する単語の中で、最も基本的で、現在でも使用されている一音節の「クラーイ (край)」という単語には「地域、隅、境、端」などの意味がある。

原子力関係者にはあまりにも有名であるが、筆者が原研に入所した年である 1986 年 4 月 26 日、ベラルーシとの国境近くのチェルノブイリ原子力発電所で事故が発生し、国内外に大きな被害が及んだ。ウクライナ国内で影響があった地域には 220 万人ほどが住んでいた。事故後、汚染地域の外にスラブチッチという街が作られ、かつて原発で働いていた人たちなどを住ませた。国際原子力機関 (IAEA) と世界保健機関 (WHO) によって行われた調査によって明らかにされたことによると、この事故により直接的に 56 名が亡くなり、それ以外にもこの事故を原因とする癌によって 4,000 名ほどが亡くなったといわれている。

首都であるキーウは、北緯 50 度 25 分に位置し、樺太北部、ドイツのフランクフルト、カナダのウィニペグとほぼ同緯度にある。当然のことながら、同国最大の都市で政治・経済・文化の中心地である。キーウという名称は「キーイの都市」を意味し、キーウを創建した伝説上の人物であるキーイ (ウクライナ語: Кий) の名前に由来する。旧市街はドニプロ川 (ドニプエル川) の中流右岸の高台に発達している。それに対し低地である東岸側は高層建築物が目立つ新市街となっている。人口はキーウ市内に限定すると約 295 万人、キーウ首都圏では約 350 万人だった。週末になると、歩行者天国になる市の中心部を通るフレンチャーティク通りや独立広場などが人々で賑わっていた。別名「緑の都」とも呼ばれ、市内には広大な植物園がある他、緑豊かな公園が点在し、ライラックやカシュタン (栗の一種) の花が咲き乱れる春、街路樹が紅や黄に染まる秋など、四季折々にさまざまな姿を見せる。現在は、これがどのようなになっているかは、筆者には想像がつかない。

ボルィースピリ国際空港 (図 2) が街の東 28km に位置する。東隣のボルィースピリ市に所在するが、通常「キーウ空港」と呼ばれる。主に国際線が乗り入れる国際空港である。長らく鉄道や地下鉄のアクセスがなく、バスやタクシーが必要になるなどキーウ市内からのアクセスは不便であったが、近年はキーウ旅客駅から定期的にシャトルバスが運行されて利便性が向上した。所要時間は 1 時間ほど。また、知らなかったので使わなかったが、2018 年 11 月にキーウ旅客駅との間を結ぶ空港連絡鉄道が開業した。こちらの所要時間は 40 分ほどで、深夜帯も運行されている。

最初に記載した通り 1 泊 4 日 (2 機中泊) の「弾丸ツアー」だったので、中世期のキーウの象徴として有名な観光地である聖ミハイル黄金ドーム修道院を訪問することはできなかった。代わりと言っては何であるが、宿泊したホテルから撮影した当時の市街地の写真を掲載する (図 3)。



図2 ボルィースピリ国際空港の滑走路（筆者撮影）。雪がたくさん降っているわけではないが、地面が白くなる程度には積雪がある。筆者が登場した飛行機はトルコ航空だったので、いわゆる西側の機体であったが、奥の方に駐機しているのはロシア製の機体のようである。

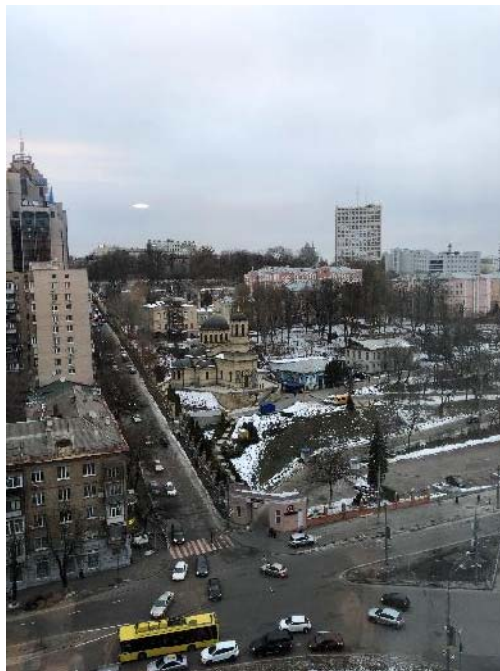


図3 2018年当時のキーウ市街（筆者撮影）。旧ソ連の都市の特徴である、ロシア正教（訪れていないので確信はないが）の教会が市内には散見される。ちなみに、奥の丘の上にある発光体はホテル内からとったために反射した照明であり、いわゆる UFO ではないのでご安心を。

4. おわりに

前々回、前回とカザフスタン編をお届けしたが、今回は ISTC と兄弟のような組織である STCU を紹介するとともに、この関連で 2018 年 12 月に訪れたウクライナの首都キーウについてご紹介した。たった 1 日あった宿泊日の夜は、ご多分に漏れず meeting diner となったため、市街地を散歩することは叶わなかった。ご存じのように 2024 年現在、ウクライナはロシアとの戦闘下にあり、当時の面影はないのかもしれない。一刻も早く平和的な解決が達成されることを祈念する。

参考文献

- [1] 深堀智生:「ISTC／SAC 議長が行くーカザフスタン編ー」、核データニュース No.138, 46-50 (2024).
- [2] 深堀智生:「ISTC／SAC 議長が行くーカザフスタン編 (その 2) ー」、核データニュース No.139, 28-33 (2024).